

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：37114

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520039

研究課題名(和文) 哲学的愛とキリスト教的愛そして恋愛の誕生

研究課題名(英文) Love in the contexts of Philosophy & Christianity and the Invention of Love

研究代表者

永嶋 哲也 (Nagashima, Tetsuya)

福岡歯科大学・歯学部・教授

研究者番号：60304698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円、(間接経費) 1,080,000円

研究成果の概要(和文)：(1) 恋愛が12世紀の発明だと言われる場合に、それは「恋愛感情の発明」のことを意味せず、恋愛観の文化的転換のことを意味していることを論じ論文として公開した。つまり恋愛に対して神聖視するという受け取り方が生じたということ意味である。

(2) アミキティア(amicitia)に関する古代哲学思想を中世の人びとがどのように受け入れたか調べるために、アベラールとエロイーズの往復書簡を検討し、成果を学会発表の形で公開した。

(3) ダンテ『神曲』とペトルルカ『わが秘密』を題材に、恋愛信仰とキリスト教信仰とが両立し、また同時に対立もしていたということを明らかにし、論文という形で公開した。

研究成果の概要(英文)：(1) When it is said that love is the invention of the 12th century, that does not mean that the "invention of romantic feelings", but that the cultural transformation of the attitude toward love. Love came to be considered to be sacred.

(2) To examine how the people of the Middle Ages accepted the ancient philosophical thought about "amicitia", I have examined the letters of Heloise and Abelard.

(3) Examining Petrarch "My Secret" and Dante "Divine Comedy", I made it clear that the Christian faith and Love faith are in conflict and at the same time compatible.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：哲学 思想史 西洋古典 西洋史 外国文学 中世哲学

## 1. 研究開始当初の背景

C.S.ルイスが『愛とアレゴリー』で展開した「恋愛は12世紀の発明である」という台詞で表現されるアイデアがある。この初期ルイスの文学史観は、12世紀の南フランスにトルバドゥールという宮廷詩人たちが突如登場し、彼らが「至純の愛」あるいは「宮廷風恋愛」という統一的な信条を作り上げ、それにもとづき肉体関係を否定する純粋に精神的な恋愛を歌った叙情詩を作り、西欧における価値観を転倒させ、感情の革新を成し遂げた、としばしば理解される。そのように理解されたうえで、これらを否定する文学史的、文化史的事実が指摘され、このルイスの考え方は批判されてきた。

別の面から記述すれば「恋愛の発明」と表現される事象に対して、思想史的な影響関係から、つまり古代哲学のアミキティア(amicitia)やキリスト教教義のカリタス(caritas)との関連から十分な検討がなされることはなかった。

## 2. 研究の目的

本研究課題は、「恋愛の発明」と表現される際の「恋愛」は「恋愛感情」の意味ではなく「恋愛に対する態度、受け取り方」の意味であるという解釈を適用することによって、西欧中世に起こった精神的変革の意味を明らかにすることを目的とした。つまり、恋愛は神聖なもので、人を高貴にするような感情であるという受け取られ方が広まったのが西欧中世であるという解釈である。そこで明らかになる精神的変革の意味は、恋愛というものに価値を置く現代の文化を相対化し、われわれの文化を正しく評価するための有益な情報になると思われる。

## 3. 研究の方法

本研究課題の研究手法としては、まず当該文献を収集し、解読し、そのうえで内容について解釈を試みるという手法がとられる。すなわち...

(1) 中世に俗語（ロマンス語）で書かれた文学作品と西欧中世に流入した古典期の文学作品の文献資料を収集する。文献を解読し、恋愛観についての描写、背景思想を検討する。

(2) 中世に影響力を持った神学書で展開されるカリタス論の文献資料を収集する。文献を解読し、神学者の恋愛に対する態度を検討する。さらに、中世文学作品を検討し、文学作品著者が有した神学理解の深さを評価し、神学理論から文学作品への影響を検討する。

(3) アリストテレスやキケローなど古代期の哲学書におけるアミキティア論に関する文献資料を収集する。文献を解読検討し、古代哲学理論から文学作品への影響を評価する。

## 4. 研究成果

(1) 「恋愛の発明」と表現される際の「恋愛」を「恋愛に対する態度、受け取り方」の意味であるという解釈を採用することによって、通例「恋愛の発明」と表現される事象がどのように説明できるかについて論じ、示すことができた。

すなわち、下記の論文「恋愛感情と感情表現と恋愛の範型 —恋愛12世紀発明説の再検討—」において、恋愛感情の本性を言語との関わりで論じ、言語を用いて表現されたフィクションが恋愛感情と相互に影響を与え合う関係であることを示した。そのうえで恋愛の受け取られ方を「恋愛の範型」と名付け、「恋愛の発明」という表現で表される事象が恋愛の範型の変更であったことを論じた。

さらに下記論文「悲劇を生む狂気と神聖な感情 恋愛が「発明」される前の恋愛の形」において、古典期の諸作品において恋愛がどのように描かれているか、つまり当時の人びとにどのように受け取られていたかを示し、「恋愛の発明」以前の恋愛の範型が以後とは大きく異なっていたことを示した。

(2) 本研究課題に取り組むに先立って研究代表者は、カリタスが「人間の尊厳」という考え方に影響を与えた可能性について指摘していた。恋愛の範型とカリタスとの関連を検討する中で、尊厳(dignity/dignitas)という語の意味が変容していったことを明らかにし、論文「尊厳の変容 —卓越、価値そして自尊へ—」においてその考察を公表した。

さらに、論文「恋愛抒情詩の伝統における愛の神聖性とキリスト教教義 —— ダンテとペトラルカに見る恋愛への共感と拒絶 ——」において、中世末期の俗語韻文（ダンテ『神曲』）とラテン語散文（ペトラルカ『わが秘密』）を題材に、恋愛信仰（神格化される恋愛とその愛神への帰依）とキリスト教信仰（他の神への崇拜を禁じる一神教たるキリスト教への信仰）とがどのように両立し、また対立していたのかということについての考察を行った。結果、ダンテにおいては奇妙な仕方では両者（愛神への崇敬とキリスト教の信仰）が共存していたのに対して、ペトラルカにおいては共存が崩れていることを見て取り、以上の論点を論文にまとめた。

さらに対神徳に分類されるカリタスを検討する中で、古代以来の枢要徳（思慮、正義、勇氣、節制）との関連で、正義に反する悪徳である「嘘言」「偽装」「偽善」について現代的な論点から考察を行うことができた。すなわち伝統的なキリスト教神学の立場からすれば、偽善は神に向き合う信仰生活においてこそ意味を持つ者であり、そうでない場面で安易に持ち出すことは不適切であるという結論を得た。その成果は論文「偽善における徳の偽装と自己満足 —— ネット言説とトマス・アクィナスを手がかりにして ——」にまとめ、九州医学哲学・倫理学会『人間と医療』に投稿した（現在、審査中）。

- (3) キケロー『友愛論 *De Amicitia*』で展開されているアミキティアについて西欧中世の思想や文学に対する影響という観点から検討を行った。さらに12世紀フランスで書かれたと推定されている書簡集 *Ex epistolis duorum amantium* について検討を行った。それらの検討の中で、中世における古代修辞学や古代ラテン語韻文の受容について調査する必要があることが判明した。

それゆえアベラールとエロイーズの往復書簡を検討し、*amor* と *amicitia* という語の使用、また古典文学的修辞の使用状況（古典ラテン語韻文の受容状況）などを分析した。また同時代のラテン語韻文やロマンス語韻文との韻律型が共通することなどから、神学の素養を有するアベ

ラール・エロイーズとロマンス語韻文を書いた作家たちとの間で共通点を見いだすことができた。その成果は下記の発表「エロイーズ書簡における *amor* と *amicitia*」において公表したが、しかしまだ論文として議論をまとめるまでは至っていない。

さらに書翰における恋愛感情の表出を適切に評価するために、中世における古代修辞学の受容と中世独自の修辞学である *Ars dictaminis* の使用について検討した。その成果は発表「エロイーズ書翰に見る中世修辞学としての書翰作文術」において公表し、また論文「エロイーズ書翰に見る中世修辞学としての書翰作文術」としてまとめ中世哲学会『中世思想研究』に投稿した（現在、審査中）。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 永嶋哲也、恋愛抒情詩の伝統における愛の神聖性とキリスト教教義 —— ダンテとペトラルカに見る恋愛への共感と拒絶 ——、福岡歯科大学学会雑誌、査読有、39巻1号、2013年、1-9頁
- ② 永嶋哲也、尊厳の変容 —— 卓越、価値そして自尊へ、人間と医療、査読有、1号、2011年、40-49頁  
[http://pe-med.sakura.ne.jp/kyushu/?page\\_id=190](http://pe-med.sakura.ne.jp/kyushu/?page_id=190)
- ③ 永嶋哲也、悲劇を生む狂気と神聖な感情 恋愛が「発明」される前の恋愛の形、自然と文化、査読無、37号、2010年、17-40頁  
[http://www002.upp.so-net.ne.jp/tetsu/study/14\\_ate.pdf](http://www002.upp.so-net.ne.jp/tetsu/study/14_ate.pdf)
- ④ 永嶋哲也、恋愛感情と感情表現と恋愛の範型 —恋愛12世紀発明説の再検討—、自然と文化、査読無、36号、2009年、25-37頁  
[http://www002.upp.so-net.ne.jp/tetsu/study/13\\_exemplar.pdf](http://www002.upp.so-net.ne.jp/tetsu/study/13_exemplar.pdf)

〔学会発表〕(計2件)

- ① 永嶋哲也、エロイーズ書翰に見る中世修辞学としての書翰作文術、中世哲学会、2013年11月10日、於・京都大学

- ② 永嶋哲也、エロイーズ書簡における amor と  
amicitia、京大中世哲学研究会、平成23年11月  
26日、於・京都大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕(計0件)

## 6. 研究組織

研究代表者

永嶋 哲也 (NAGASHIMA, Tetsuya)

福岡歯科大学・口腔歯学部・教授

研究者番号: 60304698